

キハダの鼻腔における寄生虫をめぐって

鈴木治郎（旧遠洋水産研究所浮魚資源部長）

はじめに

私が研究所に入って最初に仕事らしきことをしたのは、小型キハダとメバチの外観からの見分け方に関する論文作成を手伝ったことであった。当時、大西洋マグロ類保存国際委員会（ICCAT）では、急速に発展した巻き網漁業や竿釣り漁業で、混獲され外見が類似する体長30～40cmのキハダとメバチの簡便な識別法が両種の正確な漁獲量の把握にとって急務となっていた。そこで、科学委員会（SCRS）で、各国がこの問題に取り組むことになったのである。焼津の魚市場で巻き網漁獲物を調査したのであるが、霜に覆われて変形した個体はかなりあり、最初はキハダに比べて数が少ないメバチを探し出すのは素人にはかなり難しかった。しかし、縞模様や体の形などから、訓練すればかなり正確に判別できる事が分かった。この調査では、外観からの識別に重きを置いたために、次に述べる鼻腔に存在する寄生虫については、その存在も知らなかった。ところが、NHKの連続テレビ小説『らんまん』を見ていたら、牧野富太郎が発見し、ロシアの専門家に鑑定を依頼した植物に *makinoi* という名の入った学名がつけられたというのがあった。そこで思い出したのが、この寄生虫(図：学名は *Nasicola klawei*) にある *klawei* に由来する人名である。なお、ICCAT の Field manual のキハダの項にこの寄生虫のことが記述されており、この寄生虫は85～95%の割合でキハダに寄生しているが、メバチには寄生しないので両種の識別に使えるとされている。この寄生虫についてさらに調べていくと、次々と興味深い関連事項に遭遇したので、それを紹介したい。

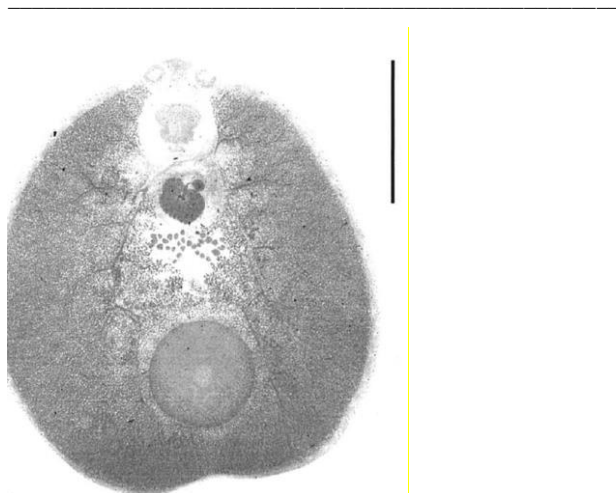


図 *Nasicola klawei*

(Kohn et al. 2004 より引用、標本は Meguro Parasitological

Museum Collection 15.438)

右上の縦棒は 5 mm を示す

IATTC（全米熱帯マグロ類委員会）と日本のマグロ研究者の交流

少し遠回りになるが、IATTC と日本のマグロ研究との関わり等について述べよう。IATTC はカリフォルニア州南部のサンデエゴ郊外のラホヤにある東部太平洋のマグロ類資源を研究・管理する地域漁業管理委員会の一つで、マグロ関係では世界で最初に設立された国際機関である。IATTC は戦後日本のマグロはえ縄漁業が急速に拡大し、管轄している東部太平洋にまで達したことで、日本のマグロ関係の研究所（旧南海区水産研究所、後に引き継がれた旧遠洋水産研究所）から日本の延縄漁業の詳しい情報を得る必要性を認識し、資金を提供して、日本人研究者を受入れてきた。最初にラホヤに派遣されたのが1960年代初めで、須田明氏であった。その後数年ごとに多くの日本人研究者が現地で共同研究を実施した。現在は、詳細な漁業情報が公表されるようになったせいも、このような共同研究は行われていない。日本人研究者が派遣され始めた頃は、シェーファーモデルで有名な M.B. Schaefer(資源解析で用いられる Production model の創始者)がおり、Schaefer から見込まれた須田さんは彼から滞在を延ばしてほしいとたびたび要望されたそうだが、日本のマグロ漁業の最盛期でもあり、滞在を延長することはなかった。その後、カリスマ的だった James Joseph 所長がおり、年次会議などで、資源研究から管理までほとんど1人で説明し、独演会の感があり、世界最高水準の研究・管理が行われていた。私が滞在していた時には、シェーファーモデルを一般化したモデル (Pella-Tomlinson による Generalized Production Model) の共著者であった P.K. Tomlinson が私の研究のパートナーであった。Tomlinson はその才能を Joseph に見込まれて、IATTC にひっぱり込まれたようだ。彼は数学的素養に優れ、コンピューターが使用され始めたころからそれを自由に使いこなすと同時に、漁業の実態にも精通していた。しかし、出世とか名誉欲はからきしない、ちょっと変わりものでもあった。

Klawe とは誰か

さて本題に戻って、IATTC には W.L. Klawe (親しみを込めて、ピテックと呼ばれていた) というポーランド系のアメリカ人研究者が在籍していた。数年前に他界したが、IATTC で研究をした日本人研究者は、研究以外にも慣れない外国での日常生活等いろいろな面で大変世話になったものである。彼は水産研究者というより、博物学者の感があり、動・植物等自然に関するものに文字どおり博識であった。その後、数年たって知ったのが、先に述べたように鼻腔に寄生する特定の寄生虫がキハダにはほぼ存在するが、メバチには存在せず、両種の識別指標となることである。この寄生虫は成長しても 1 cm そこそこの円形で平たく半透明に見える地味な寄生虫であり、実際に鼻腔を少し切開してみると、すぐに見つかったし、調べたキハダには確かにすべて存在していた。ただし残念ながら、その時にメバチについても調べたかどうかは覚えていない。何度か IATTC に滞在した時に、この寄生虫がピテックの本名のつづりに似ていることに気が付き、なにか関係があるのか彼に尋ねたことがある。答えは、彼がこの寄生虫の第一発見者であり、学名の命名者が彼の名を入れたということであった。

この寄生虫の有無でキハダとメバチは簡単に区別できるか？

ところが、この寄生虫 (*Nasicola klawei*) について、文献を調べていると、ブラジル沖のメバチの鼻腔にも類似した別種の寄生虫が存在しているという報告があり、そうであるなら、この寄生虫の有無でキハダとメバチを簡単に識別するのは無理ではないかと疑問に思った。そこで、魚類寄生虫の専門家である長澤和也氏にこの疑問を尋ねてみた。話は複雑で、結論を出すにはさらに詳しい研究が必要であるようだが、長澤氏によると、これら2種の寄生虫は、よく似ているので、肉眼で簡単には識別できないだろうという事であった。そうであるなら、ICCATのField manualは修正する必要があるかもしれないし、私もいつかメバチの鼻腔を詳しく見てみたいと思っている。さらに長澤さんによれば、寄生性カイアシ類の新種 (*Caligus klawei*) もビテックが第一発見者で、彼の名前が献名されたという。さらに、ビテックは、東部太平洋の外洋性表層魚から膨大な数の寄生性カイアシ類を採集して、その標本を三重県立大学水産学部(現三重大学水産学部)の故椎野季雄教授に寄贈しており、椎野先生はその標本を用いて多くの論文を出版したことも教えてもらった。

おわりに

名も知れぬ寄生虫をめぐり、身近な事柄にこの寄生虫が関わっていることを知りえたことは驚きだった。なかでも、サバ科魚類(サバ類やマグロ類)に寄生する世界中のカイアシ類を調べ、種別の分布図まで作成した米国人の大論文があることも長澤さんから教えてもらった。この小論で取り上げたマグロ類の鼻腔に存在する寄生虫の仲間は、キハダやメバチだけでなく、大西洋クロマグロ等にも存在しているようである。資源解析に重点が置かれている昨今であるが、直接それに関連しなくとも、この種の研究の充実も望まれるし、サバ科魚類の鼻腔に存在する寄生虫の包括的な研究をする日本人がいてもいいのではないかと思う。それが、その国の科学研究の底力を示すものではないかと思うからである。最後にこぼれ話を一つ：ビテックと枝豆をつまんでいた時に、彼がしきりとそれを“えどまめ”と言うので、そうじゃなくて、枝豆ですよと言ったら、げげんな顔をした。彼は江戸豆と思っていたようである。弘法も筆の誤りということで、博識の彼でも間違えることがあるのだと少し安心した次第である。